



Ai Hasegawa “HUMAN X SHARK” (2017-)

「化粧品会社資生堂とのコラボレーション作品。女性を強くし、サメを魅惑する香水制作の可能性を探るリサーチプロジェクト。近くて遠い。人間と恋愛するのは骨が折れる。言葉を尽くしても、五感や行動で訴えても分かり合えない時がある。例えば犬の方が人間より信用できる気がする。どうせ分かり合えないのならばいっそ人間から遠い、コミュニケーションの可能性が未知の生物と繋がってみたい。例えば「サメ」と。

鯨はその漢字からも読み取れるように、魚類でありながら交尾器を持ち更には様々な繁殖様式を持つ。更にはある種のサメは有性生殖も単為生殖も可能だ。人間もバイオテクノロジーの発展した未来では同性間での生殖や単為生殖も可能だと言われている。私にとってサメは「未来のテクノロジーを使いこなす野性的で強い女性」を象徴する憧れの生物。今回はサメのメスに化ける為に、特殊な材料を用いてオスサメを魅惑する香水をつくれるのか？という挑戦となった。」

詳しくは<https://aihasegawa.info/human-x-shark>をご覧ください。

長谷川愛は、先端的なテクノロジーが、社会や個人の在り方をどのように変える可能性があるのか、それをどのように受け止めるべきなのかを、独創的な形で問い続ける貴重なメディア・アーティストだ。バイオを巡るスペキュラティブ・デザインの代表的な担い手として知られ、本誌の表紙には2019年1号の“(Im)possible Baby”に続いて2回目の掲載になる。敢えて一見荒唐無稽に見えかねない設定を構えつつも、地道なりサーチを行い、その過程で様々な文脈を手繰り寄せながら斬新な補助線を提示してきた。このプロジェクトでは、本大会の大会委員長、飯郷雅之博士にも取材しており、ホルモンや生理活性物質に関してディスカッションする様子も公開されている。

<https://vimeo.com/240524990>



Ai Hasegawa アーティスト、デザイナー。生物学的課題や科学技術の進歩をモチーフに、現代社会に潜む諸問題を掘り出す作品を発表している。2012年英国Royal College of Art, Design InteractionsにてMA取得。2014年秋から2016年夏までMIT Media Labにて准研究員兼大学院生。2017年から2020年東京大学ERATO特任研究員、2020年より京都工芸繊維大学および自治医科大学特任研究員、2021年より愛知県立芸術大学特任教授。「(不)可能な子供/(im)possible baby」が第19回文化庁メディア芸術祭アート部門優秀賞。森美術館、アルスエレクトロニカ等、国内外で多数展示。著書「20XX年の革命家になるには——スペキュラティブ・デザインの授業」(BNN新社)など。

<https://aihasegawa.info>